

(要約)

橋川文三の政治思想——中間者の眼

須藤 健一

序章 橋川研究の歴史と現在

本論文においては、現在も一般的には未知の思想家である橋川文三の政治思想について、主として三島由紀夫、丸山眞男、柳田国男の三者の思想との比較・対比という視座から、総合的・包括的に研究を行った。

橋川の恩師丸山眞男は、橋川没後のインタビュー形式での回想『日本浪漫派批判序説』以前のこと（以下『批判序説』以前のこと」という。）において、「現実政治についてのセンスも興味も全くない」、「政治学者の仲間で橋川君を政治学者とか政治思想史の専門研究者とか思っている人はあんまりいないでしょうね」、「社会の現実そのものに対する直観力はゼロに近い」などと、政治学者橋川に対し、全否定とも解釈し得るような辛辣な評価を下している。

他方で三島由紀夫は、作家としての視座から橋川の洞察力を高く評価している。三島は、橋川の論文「美の論理と政治の論理——三島由紀夫『文化防衛論』に触れて——」（以下「美の論理と政治の論理」という。）に対する反批判として発表した「橋川文三氏への公開状」の中で橋川を礼賛している。三島は、彼の壮絶な最期まで橋川を高く評価していた。

三島の高評価を除き、橋川は、『日本浪漫派批判序説』（以下『批判序説』という。）の作者としてのみ認知されており、現実政治、経験科学としての政治学は不得手であり、各著作は断片的で体系性に欠けるものであったと一般的には評価を受けている。本論文では、橋川文三を分析し、上記評価の正否を計測するための基礎的視角として、三人の傑出した同時代人、第一章においては三島由紀夫、第二章においては丸山眞男、第三章においては柳田国男の思想と橋川の思想との比較を行うことによって、橋川の特徴、独自性を明らかにする。

橋川は、政治闘争において敗北した英雄や、近代化の潮流に取り残された人間たち——敗者——への比類無き眼差しの暖かさを有しており、丸山眞男らが取り扱わなかった人物や思想に敢えて着目すると共に、当該対象に即した内在的、総合的理解を通じて、普遍的概念としての「政治」（自己と他者との関係の秩序化）について一貫して考究している。橋川は思想史研究のスタンスは、考察の対象が仮にどのような否定的対象であるにせよ、黙殺やタブー視による思考停止を回避し、「ある一般的な人間の事実としてとらえなおす」ことにあつた。

第一章 三島由紀夫との論争と共感と

第一章第一節では、三島の橋川宛書簡や対談等における橋川への言説について検討した結果、三島は評論「若い世代と戦後精神」を通じて橋川を評価し、『歴史と体験』及び「夭折者の禁欲」により高評価が決定づけられ、「三島由紀夫伝」でも橋川への絶大な信頼感は引き続き継続し、「美の論理と政治の論理」により「社会科学の領域で現下おそらくみごとな『文体』の保持者として唯一の人」であり、且つ「悪魔的な文体の冴えや頭脳の犀利」を有する稀有な「才能」であると評価するに至ったことが明らかになった。

第一章第二節では、「夭折者の禁欲」から「中間者の眼」に至るまでの橋川の三島論三部作について考察した結果、橋川の世代的共感が横溢しており、基本的には三島への賛意と共感に満ちたものであったことが明らかになった。

「夭折者の禁欲」では、戦争中に「浄福」を享受していた三島が、敗戦後の日常性の瀰漫する曖昧な世界における生の不在を、夭折者の禁欲によって切り抜けようとしているが、ロマン主義者三島の本質はやはり突破の思想に存するのではないかと推察している。

「三島由紀夫伝」では、戦前・戦中の三島の来歴が重要視されている一方で、古典主義者三島の側面が強調され、穏健で常識的な三島論が展開されている。

「中間者の眼」では、橋川が三島の政治的な発言及び作品に初めて本格的に対峙し、三島の思想が終局的には「死」の観念と密接不可分に繋がっているという、突破の思想の特殊性を浮き彫りにしている。

第一章第三節では、橋川・三島論争「文化防衛論」、「美の論理と政治の論理」、「橋川文三氏への公開状」について考察した結果、橋川は三島の政治思想の問題点を、美の論理と政治の論理との混同、あるいは美の論理と政治の論理との統一化の企図即ち突破の思想に見ており、橋川は政治思想は、この時点で三島の美的政治理念を批判する思想的立場に到達し、突破の思想を克服し得たことが明らかになった。

「美の論理と政治の論理」では、橋川は三島の「文化防衛論」について大別して三点批判していた。第一に、日本近代における「文化概念としての天皇」の機能喪失についてである。橋川は、明治憲法体制以降天皇は既にその機能を喪失していたと指摘した。

第二に、「文化概念としての天皇」の喪失、「政治概念としての天皇」の利用が顕在化した時期についてである。橋川は、「政治概念としての天皇」の利用は、明治前期の神風連の乱や西南戦争の段階で既に顕在化していたと批判した。

第三に、「文化概念としての天皇制」を擁護することを目的としての、天皇と軍隊との直結という提案の不可能性である。橋川は、軍隊は、明治国家体制下においてさえ「文化の全体性」に対する反措定の役割を持っており、天皇と軍隊とが直結した時点で、即時に天皇の政治化つまり「政治概念としての天皇」が齎されると批判した。

第一章第四節では、三島死後の橋川の三島論「私の日本人論——清沢洌の『戦中日記』を読んで——」、「三島由紀夫の生と死」、「狂い死の思想」について考察した結果、三島の死を「ある一般的な人間の事実」として捉えようとする橋川の基本的姿勢が堅持されている点、三島の死が突破の思想の現れであることを洞察した上で、三島の死こそが彼の思想即ち美学の完結であるという解釈を否定し得ている点が明らかになった。

「狂い死の思想」では、三島の死を「中間者の眼」や「美の論理と政治の論理」で展開した純粹尊攘派の美的テロリズム又は諫死の系譜に明確に位置づけた。

「三島由紀夫の生と死」では、「死の共同体」という概念が、戦後の三島が作為した、「楯の会」の結成原理としても伏在していたという重要な指摘がなされていた。

「私の日本人論」では、三島の美的政治理念即ち突破の思想の最も適切な概括がなされていた。橋川の批判の通り、美の論理と近代的政治の論理とは相容れないのであり、「文化の一般意志」即ち美の論理と「政治の一般意志」即ち政治の論理は、日本近代においては両立し得ない。三島の日本近代批判に基づく構想通りには、政治的現実「ロマンティックには進まない」のであった。

第二章 丸山政治学との緊張的關係・批判的対決

第二章第一節では、恩師丸山による最大の橋川批判と言える『批判序説』以前のことについて検討した結果、以下の諸点が明らかになった。丸山は橋川の資質について、保田や箕と同様のロマン主義者の問題点（「皮膜」を通じて「現実」と接する態度）を有していると思っている。また丸山は、橋川は現実政治に対する関心及びセンスが欠落しており、「政治」あるいは「政治思想」について語る資格は無いと、政治学者としての橋川に対し非常に厳しい評価を下している。但し、『批判序説』については、「橋川君の最高傑作」と高く評価している。また、丸山の竹内好に関する解釈は橋川が『批判序説』で提示したものと同一であり、丸山は『批判序説』から学んでいる。昭和三十九年書簡から、丸山は橋川の『歴史と体験』を、彼の研究関心・視角がよく理解できる著作であると評価していた。昭和三十九年書簡は、丸山が『批判序説』以外の著作に言及している唯一の資料である。昭和三十九年書簡及び昭和五十一年航空書簡から、両者は良好な師弟関係を保っていた。『丸山眞男回顧談』及び『丸山眞男手帖』から、丸山の橋川に関する評価は、『批判序説』の作者としての橋川に関するものに終始している。序章で確認した『批判序説』の作者としての橋川という現在までの通説的な橋川評は、「日本の不謬ならざる法皇」（エドワード・G・サイデンステッカー）たる丸山が形成したものなのであった。

第二章第二節では、丸山が「橋川君の最高傑作」と評した橋川の主著『批判序説』について、同時代評から現代の批評といった先行研究を踏まえ検討した結果、第一に、丸山の「軍国支配者の精神形態」における三類型（神輿・官僚・無法者）のいずれにも保田が該当しない点から疑義を呈しており、丸山政治学への懐疑が既にして胚胎していること、第二に、後年の「明治政治思想史の一断面——『地方』の擬制と実体をめぐって」（以下「明治政治思想史の一断面」という。）における問題意識が現れている作品であり、「美の論理と政治の論理」の原型として位置付けることができる作品であることが明らかになった。『批判序説』は、保田への共感を抑制しつつ、橋川の学問的著作においては最もザッハリッヒに、そしてロジカルに手堅い叙述を進めている。美と政治の二元論的な理解や明治国家の家父長制的国家観に係る分析など、丸山の図式や保田観を批判しながら、丸山政治学から摂取した理性的、複眼的な思考法も存分に生かされている。それ故、丸山政治学に対する懐疑の萌芽は見られるものの、俯瞰的に見れば基本的には丸山政治学の枠組内での政治思想史研究であると言える。

第二章第三節では、第一に、「丸山批判の新展開」について検討した結果、橋川が吉本による丸山批判の問題意識を受け継ぎ、丸山政治学——丸山の日本ファシズム論——に対する明示的批判を表明したことが明らかになった。第二に、「昭和超国家主義の諸相」について検討した結果、「^{エクストリーム}超国家主義ではなく「^{オーバー}超」国家主義という、丸山政治学の日本ファシズム研究とは全く異質な新しい観点を提示し得たことが明らかになった。

第二章第四節では、第一に、丸山の政治概念を把握するため「政治とは何ぞや」、「政治学入門（第一版）」、「政治」（社会学辞典）及び『政治学1960』について検討した結果、丸山の政治概念が、権力的契機・正統性的契機・技術的契機・倫理的契機の総合体としての政治であり、また政治を具体的、現実的状况の中において次善の選択を果すための「可能性の技術」（ビスマルク）であると思っていることが明らかになった。第二に、橋川の

「政治」理念を把握するため「絶対者の探求と政治」及び「象徴としての政治」について検討した結果、橋川の政治理念が、絶対者を探求するという契機を含む政治、美的象徴としての、自己表現としての政治であることが明らかになった。また「象徴としての政治」は、橋川における突破の思想と保守の思想との両義性、突破の思想への共感を示唆しており、突破の思想への共感を「象徴」する存在としての大西郷が登場している。丸山と橋川の著作の検討から、橋川は丸山政治学から学びつつも、そこから導出される政治理念は、近代的政治観を超える「政治的なもの」を射程に入れたものであった。

第三章 柳田民俗学への眼差し——日本における保守主義の模索

第三章第一節では、橋川の「柳田国男伝」について検討した結果、柳田の文学的感性及び詩人的資質に特に着目しつつ、柳田の民俗学について、第一に、過去・現在・未来の者を含めた一国総体の幸福を目標とする政治学、政策科学であったと見做していたこと、第二に、明治政府の合理主義的統治に対する批判——日本近代批判——の可能性を見出していたこと、第三に、橋川の「柳田国男伝」が従前の柳田論の総合的・総括的作業となる重要な論考であったことが明らかになった。

第三章第二節では、主として橋川の「明治政治思想史の一断面」について検討した結果、第一に、橋川が柳田の地方改良運動批判に対し、帰納主義的方法及び内省的懐疑の方法という柳田民俗学を特徴づける方法と思想に特に注目することによって、明治政府の合理主義的統治に対する批判——日本近代への批判の視座を見出そうとしていた点が明らかになった。橋川及び柳田が批判する通り、地方改良運動における神社統一整理政策や「町村是運動」は、明治政府が公権的に規定した自治制という法制度即ち抽象的体系から「地方」を演繹的に導出し、自己の主観的地方像を自然村落に投影させた、帰納・実証主義とは程遠いものであった。明治末期の地方改良運動の「失敗」の過程には、明治末期官僚の制度的統合の推進による「地方」と近代的自我の一層の疎外という、明治精神史における負の断面が如実に現れている。対して、地方改良運動の政治思想を有効に批判し得た思想家が、柳田国男であり、柳田民俗学の方法であった。

第三章第三節では、橋川の「保守主義と転向」及び「日本保守主義の体験と思想」について検討した結果、当該論文が柳田国男を最も純粋な日本の保守主義者として位置付ける試みであったと共に、橋川が日本浪漫派を克服する思想として柳田の保守主義研究に着手し、自らが依拠すべき思想として保守の思想を受容したことが明らかになった。

橋川の分析による保守思想の特徴は、時間体験と改革に対する態度に現れる。保守主義者は現在を過去の最終段階における時間として体験するため、改革に対する態度として、現状の個別具体的な事実が望ましくない場合、別の個別具体的な事実へと交換つまり改善、改良していくことを目指す。また、持続及び生成の重視という観点によって無限の変化の持続である過去・現在・未来を一体的に把握する保守的思考の特質から、人間性への信頼、人間が形成する歴史への信頼という契機が生じる。

また、橋川にとって、「持続するものへの信愛」により戦後人間となった天皇と共に生きることを選択した白鳥義千代の姿勢は、柳田の「未来を愛すべきこと」という言葉に対する最も優れた解答の一つであり、橋川は、柳田と同等に、白鳥義千代を日本の最良の保守主義者として見做していた。なお、第一章で論じた三島と白鳥の思想とが特に対照的であ

り、突破の思想と保守の思想の相違を現している。

橋川の柳田研究は、「近代化理論」への懷疑から始まる戦後社会科学の「パラダイム」転換に掉さすものであったが、橋川による柳田論の特徴は、柳田の民俗学における方法と思想に注目している点にある。橋川は柳田民俗学を、帰納主義及び内省的懷疑の方法に即し、過去・現在・未来の者を含めた一国総体の幸福を目標とする政治学、政策科学であると定位しており、明治政府の合理主義的統治については日本近代に対する批判の可能性を見出していた。

終章 橋川文三の政治思想——中間者の眼あるいは突破の思想と保守の思想の両義性

本論文の考察の結果得られた知見及び思想的内在問題を基に、橋川の思想的立場を時系列に即して総括すると、第一に、戦前における橋川の思想的立場は、保田及び三島と同様の突破の思想に存する。橋川は、第一高等学校生であった昭和十四年から十五年にかけて日本浪漫派の熱烈な心酔者となり、日本浪漫派の思想によって初めて、「自己の存在の意味を理解しえた」と個人的な体験を述懐した上で、橋川の世代にとって固有の体験であり、精神形成に切り離せない思想であったと位置付けている。橋川が保田の文章に惹かれた理由は、何より自身の言いたいことを言ってくれているという直観が働いたためであった。そして当時橋川が言いたかったこと、保田が繰り返し説いていたこととは、「近代」という名称で総括されるシステムに含まれる欺瞞性や矮小性に対する批判であった。混沌とした時代状況の中で自己の知的な無能観を痛感しつつも、なお誠実な生き方を模索していた少年たちにとって、保田における方法としてのイロニーが大きな魅力をもったのであった。この方法としてのイロニーとは、何事も為し得ない人間たちが自己の存在を維持するための虚構の弁証法であり、且つ知的に洗練された自己認識の方法であった。橋川にとって日本浪漫派の思想は、弱者・敗者の無力感を方法としてのイロニーによって融和せしめると共に、一層官僚化、統制化を増す当時の社会の中で、保田らが展開した徹底的な文明開化批判、官僚主義批判が自己の精神的な支えとなったという、二重の意味で自己を救済せしめた思想であった。要するに、橋川にとって保田の思想とは、無力なる自己及び虚偽の近代を突破し、自己の存在を回復させるための思想なのであった。

第二に、戦後初期——丸山との邂逅から一九六〇年頃までの橋川の思想的立場は、突破の思想を明確に否定しており、丸山政治学の摂取によって育まれた、「作為の政治」を肯定する近代の思想、理性の思想に存する。

第三に、戦後中期——一九六二年から一九六八年頃までの橋川の思想的立場は、丸山政治学を基礎とする近代の思想、理性の思想ではなく、勿論突破の思想でもなく、第三の道——柳田から学んだ保守の思想に存する。

第四に、戦後後期——一九七〇年以降の橋川の思想的立場は、最終的には突破の思想への共感を捨て去ることはできず、保守の思想の重要性を認識しながらも、突破の思想と保守の思想との両義性の思想的立場を選択せざるを得なかった——「孤立者」そして「中間者」として。

橋川は、季刊『辺境』創刊号から「昭和維新試論」の連載を開始したが、「昭和維新試論」は第一章から第三章までが渥美勝論であり、突破の思想への共感が如実に現れてくる。橋川は、昭和維新の源流となる精神史的衝動が胚胎する時期として、一九二〇年代前後を位

置付け、一九二一年に安田善次郎を暗殺して自殺した朝日の遺書の内容から、昭和維新思想の根底に伏在する心性を定義する。橋川によれば、昭和維新の思想とは、「何故に本来平等に幸福を享有すべき人間（もしくは日本人）の間に、歴然たる差別があるのかというナイーブな思想」であり、「人間的幸福の探求上にあらわれた思想上の一変種」であった。橋川は、この昭和維新の心性を先駆的に、最も鮮烈に体現した人物こそが、右翼思想家の渥美勝であったとするのである。

「昭和維新試論」の渥美勝論は、「西郷隆盛の反動性と革命性」では木戸や大隈の証言を借用して辛うじて成立していた「作為の政治」や責任倫理概念からの批判というパースペクティブが後景に退いてしまっており、昭和維新の実現を待望した不幸な青年たちの突破の思想に対する共感の方向へと思想的傾斜の度合いが高まっている。「昭和維新試論」の開始時から、橋川思想において突破の思想と保守の思想との両義性が不可避免的に成立している。本論文における橋川の両義性とは、橋川思想が、保守の思想の受容後にも突破の思想への共感を捨て去ることができずに、最終的には突破の思想と保守の思想との両義性という思想的立場に位置していたという意味での両義性のことを指す。

本論文の締めくくりに、橋川政治構想——「隠岐騒動」、「隠岐コンミュン」への多大な共感について確認した。橋川は傑作『ナショナリズム』において、幕末の優しき革命としての「隠岐コンミュン」について論じている。「隠岐コンミュン」とは、一八六八年三月、隠岐島民三千人が蜂起の上松江藩郡代を追放し、一時的に樹立した民衆による自治的共同体のことである。隠岐島民たちは、主として国学の思想に基づき「天朝の愛民」たることを自認し、ごく短期間ではあったが、松江藩郡代に代わって国外諸勢力の侵攻に対し、一致団結して抵抗することを誓ったのであった。橋川は、「隠岐コンミュン」を西南戦争に先立つ日本近代批判の可能性の一つとして見ている。橋川が語るこの政治構想は、当然のことながら実現可能性の視座から大きな問題があると言わざるを得ず、橋川の突破の思想への共感を示唆する「夢想」や「理想」の一例に過ぎないのかも知れない。しかしながら、「隠岐コンミュン」に至純の夢を見ていた橋川が、三島の突破の思想——テロリズムや武力による性急な解決——を決して認めていなかった点は断定できるのである。

〈以上〉